

カツオ 中西部太平洋

Skipjack, *Katsuwonus pelamis*



漁獲の動向

漁獲量は、主に竿釣りにより、1960 年前後には 10 万～17 万トン、1970 年には 20 万トンを超えた。1970 年代後半には竿釣りが 30 万トンを超える水準となり、全体では 40 万トン台となった。1980 年代以降はまき網による漁獲量が急増し、1990 年代には 100 万トン前後に増大、さらに 2009 年には 180 万トン近くに達したが、2011 年にかけて減少した後、再び増加に転じ、2015 年は 180 万トンと過去最高を記録した 2014 年から約 20% 減少した。2016 年の漁法別漁獲量（暫定値）は、まき網が 137 万トンで 78%、竿釣りが 15 万トンで約 8%、その他の漁業が 25 万トンで約 12% である。2016 年については、国別漁獲量は、2009 年を除き 2010 年までは日本が最大であったが、2011 年には 24 万トンに減少し、インドネシアが 27 万トンで最大となり、これ以降も高く推移している。韓国、フィリピン、台湾、米国は近年それぞれ 15 万～25 万トンほど漁獲している。日本沿岸域のひき網による漁獲は 1,642 トンであり、日本近海漁獲量の約 2% 程度である。

管理・関係機関

中西部太平洋まぐろ類委員会（WCPFC）
太平洋共同体事務局（SPC）

生物学的特性

- 体長・体重：尾叉長 100 cm・25 kg
- 寿命：6 歳以上
- 成熟開始年齢：1.5 歳
- 産卵期・産卵場：表面水温 24°C 以上の海域
- 索餌期・索餌場：表面水温 15°C 以上の海域
- 食性：動物プランクトン、魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海鳥類など

利用・用途

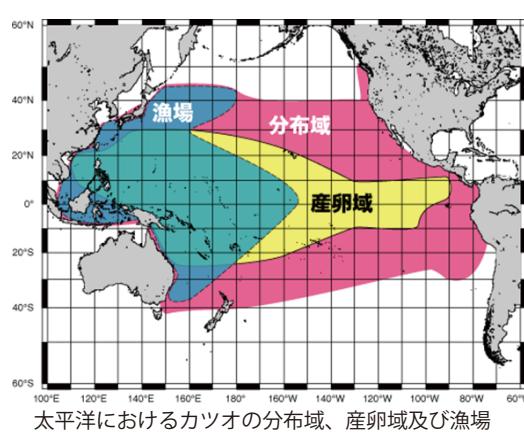
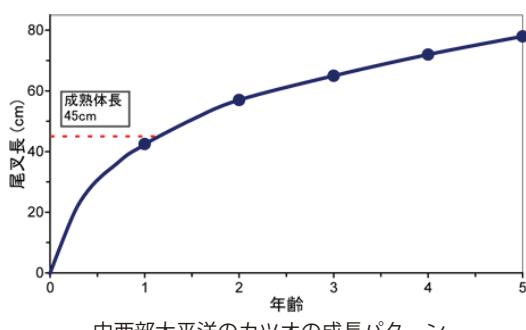
缶詰や節原料、刺身・たたきによる生食

漁業の特徴

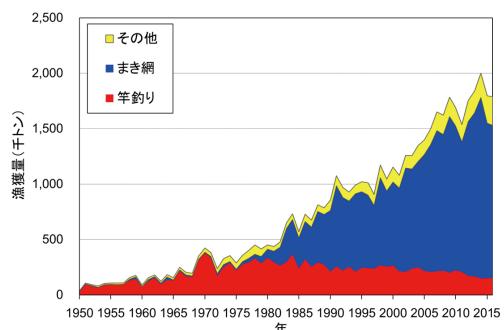
1950 年代から 1970 年代までは主に竿釣りが中心で漁獲量が伸びていった。1980 年代にはいると漁場の拡大に伴う活餌保持の問題と燃油高騰等の経済的要因から遠洋竿釣り漁船数が減少して竿釣り漁獲量の伸びが停滞した。竿釣りの漁獲量は、1980 年代後半以降は緩やかに減少している。1980 年代には各国のまき網による熱帯水域漁場の開発が始まって漁獲量の急増期に入り、以降現在までまき網の漁獲量は増加している。竿釣りは、2005 年頃まで日本が約 6 割を占めていたが、次第に減少し、2006 年以降はインドネシアが最も漁獲量が多くなり、近年の日本が占める割合は 4～5 割ほどになっている。まき網については米国、韓国、台湾及び日本の遠洋漁業国が近年の漁獲量の 5～6 割を占め、他はインドネシア、フィリピンが多い。

資源状態

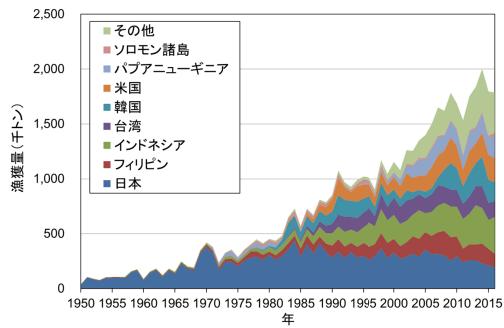
最新の資源評価は SPC の専門家グループにより 2016 年に行われ、Multifan-CL を用いた 1972 年から 2015 年について実施された。SPC は、13 通りの評価結果を示し、どの結果も同じように見えるとしつつも、その中の 1 つを取り上げ、資源は過剰漁獲の状態ではなく、乱獲状態にも陥っていない。また、資源状況は改善し、漁業による圧力は減少していると評価した。8 月の WCPFC 科学小委員会においては、SPC の評価に対し、日本、中国、台湾は、どの評価結果もあり得るのであれば、その上限と下限の範囲で示すべき、また評価モデルの設定等に問題があり、SPC が恣意的に選んだように見える評価結果は漁業者との感覚とも大きく乖離しており、支持できないと主張した。その結果、評価結果は承認されなかった。また科学小委員会は、SPC が示した計算結果のうち、いくつかは現在の産卵資源量が管理目標を下回っていることを留意するとともに、分布域縮小に関する研究の継続等を勧告した。



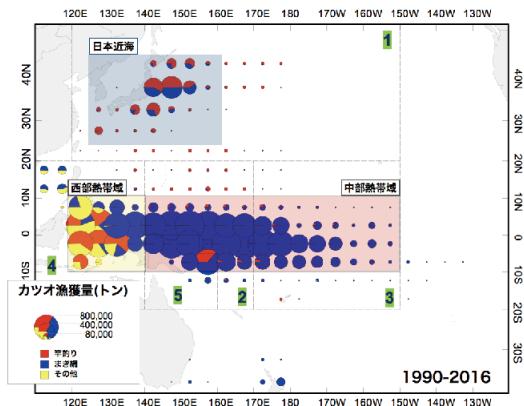
管理方策	
<p>WCPFC では、2017 年 12 月の年次会合において、既存のメバチ・キハダ・カツオの保存管理措置が 2017 年で失効し、規制がない状態に戻るため、2018 年以降の措置について議論が行われ、2018 年 1 年間の暫定措置として以下のように合意された。なお、島嶼国以外のメンバーが大型まき網漁船の隻数を増やさない措置は継続となった。1. まき網漁業による EEZ 内、公海域 FAD 禁漁期間がそれぞれ 3 ヶ月と 5 ヶ月に短縮、2. 公海操業日数制限は先進国に加え、島嶼国がチャーターする船にも適用、3. FAD 個数制限を 1 隻あたり常時 350 個以下とする。2015 年 12 月の WCPFC 第 12 回年次会合においては、カツオの長期管理目標として、①漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 50% を暫定的な目標とすること、②この管理目標値は遅くとも 2019 年に見直され、それ以降も適宜見直されること、③見直しに際しては、日本沿岸域への来遊状況等に関する科学小委員会の勧告が考慮されること、が合意されている。</p>	



中西部太平洋におけるカツオの主要漁法別漁獲量の経年変化



中西部太平洋におけるカツオの国別漁獲量年変化

中西部太平洋におけるカツオの漁法別漁獲分布（1990～2016 年）
赤：竿釣り、青：まき網、黄：その他

カツオ（中西部太平洋）の資源の現況（要約表）

資源水準	高位
資源動向	一
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	175.4 万～ 200.2 万トン 最近（2016）年：178.6 万トン 平均：183.5 万トン（2012～2016 年）
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	19.2 万～ 25.8 万トン 最近（2016）年：19.2 万トン 平均：23.0 万トン（2012～2016 年）
管理目標	（暫定）漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 50%
資源評価の方法	統合モデル（Multifan-CL）による解析
資源の状態	2016 年科学小委員会では合意できず
管理措置	<p>■メバチ・キハダ・カツオの保存管理措置は、2018 年 1 年間の暫定措置として、まき網漁業による EEZ 内、公海域 FAD 禁漁期間がそれぞれ 3 ヶ月と 5 ヶ月に短縮、公海操業日数制限は先進国に加え、島嶼国がチャーターする船にも適用、FAD 個数制限を 1 隻あたり常時 350 個以下とすることが決まった（FAD 操業規制はメバチ幼魚死亡率削減を目的とするが、本種にも影響を与えていた）。</p> <p>■長期管理目標として、①漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の 50% を暫定的な目標とすること、②この管理目標値は遅くとも 2019 年に見直され、それ以降も適宜見直されること、③見直しに際しては、日本沿岸域への来遊状況等に関する科学委員会の勧告が考慮されることについて、2015 年第 12 回年次会合で合意。</p>
最新の資源評価年	2016 年
次回の資源評価年	2019 年